

令和8年度「看護の日」優良看護職員等受賞者一覧

1 看護功労（14名）

（種別、職種毎に五十音順・敬称略）

職 種	氏 名	主 な 経 歴 等	主 な 功 績
保健師	高橋 晶子 <small>たかはし しょうこ</small>	南三陸町保健福祉課 課長	<p>昭和 60 年に旧志津川町（現南三陸町）へ入職して以来、町の保健師として町民の健康保持と福祉の向上に尽力した。特に高齢者支援に長年携わり、介護保険制度の立ち上げや、在宅生活支援、介護予防、認知症対策などの基盤構築に貢献した。</p> <p>認知症対策においては、県のモデル事業に早期から取り組み、認知症サポーターの養成や、地域住民・関係機関との協働による支援ネットワークの構築、地域包括ケアの推進に中心的な役割を果たした。東日本大震災の折には、自らも被災しながら公衆衛生活動を牽引し、国立長寿医療研究センターの支援を得て高齢者の生活不活発病調査および予防対策を実施した。令和3年度からは保健福祉課長として、新型コロナウイルス感染症対応やワクチン接種体制の整備にも奔走した。</p> <p>定年退職後も再任用職員として、障害者や生活困窮者の支援業務に従事している。また、看護協会の役員として地域の看護職の人材確保や育成にも携わるなど、多方面から地域保健を支え続けている。</p>
保健師	高橋 弘美 <small>たかはし ひろみ</small>	富谷市子育て支援センター 所長	<p>平成 12 年、富谷市初の心身障害者援護施設等に従事し、当時は未整備であった障害者の就労支援において、ヘルパー養成講座の受講支援を通じた介護施設への就労を実現した。当時の活動内容は現在も継続され、利用者の自立に寄与している。また、東北大学と連携した ALS 患者の意思伝達支援に関する取り組みを県の研修で発表したほか、地域福祉フォーラムの開催や、市制移行に伴う外出支援事業「とみパス」の立ち上げなど、福祉の基盤整備と体制構築に尽力した。</p> <p>母子保健分野では、東日本大震災後に南三陸町の乳幼児健診立ち上げのため、合同チームの一員として災害支援に従事。また「富谷市子どもにやさしいまちづくり事業」の事務局として、令和6年の国際会議にて市長が日本代表として登壇した実践報告のとりまとめをはじめ、国内での啓発に努めるとともに、令和8年3月の「富谷市子どもにやさしいまちづくり条例」公布に至る一連の業務を遂行した。さらに、国が推進する「はじめの100か月の育ちビジョン」普及啓発モデル事業の採択とその活動を通じ、子ども家庭支援の充実に寄与している。</p> <p>その他、こども家庭庁における乳幼児を取り巻く生活の実態調査委員会委員として調査研究に携わり、また、現在は「こども・若者参画及び意見反映専門委員会」においてこども家庭審議会専門委員として携わっている。</p>

<p>保健師</p>	<p>みうら ゆうこ 三浦 祐子</p>	<p>気仙沼市本吉総合支所保健福祉課 課長補佐</p>	<p>昭和 53 年に本吉町（現気仙沼市）へ入職して以来、保健師として母子保健や高齢者・障害者保健など幅広い分野に携わり、地域に根ざした保健活動に従事した。住民に寄り添いながら、健康保持増進と地域保健福祉の向上に貢献した功績は大きい。</p> <p>東日本大震災の折には、自らも被災し混乱の中にあるなか、発災直後から避難所や応急仮設住宅等を巡回。健康管理に加え、被災住民の心のケアに尽力するとともに、変化する地域ニーズを的確に捉え、困難な状況下での保健活動の基盤再構築を牽引した。気仙沼市退職後も、ボランティア団体「気仙沼・南三陸地区住民の健康を支える会」に所属し、「まちの健康相談室（ぬくもり）」事業を通じて住民の健康増進に寄与している。</p> <p>現在は、県保健福祉事務所の代替職員や会計年度職員として、精神保健福祉業務等の専門的な判断が求められる現場に従事。即戦力として業務遂行と組織の安定に寄与する傍ら、豊かな実務経験に基づいた助言や指導を行い、後進となる若手保健師の育成にも携わっている。</p>
<p>助産師</p>	<p>おおざり のりこ 大桐 規子</p>	<p>みやぎ県南中核病院 看護管理者兼看護部長</p>	<p>昭和 62 年に東北大学病院へ入職以来、周産期母子医療センターや産婦人科病棟を中心に精励した。看護師長としてハイリスク妊産婦ケアの確立や助産師外来の構築を牽引し、専門的看護の質向上と人材育成に大きく貢献した。また、化学療法センターにおいてもがん看護体制の整備に尽力するなど、特定機能病院としての機能強化に寄与した。</p> <p>平成 31 年からは、みやぎ県南中核病院の看護管理者として、看護師確保の強化や患者サポートセンターの立ち上げに尽力した。特に、看護師不足により休棟していた病棟の再開を実現させ、増大する急性期医療需要への対応を可能にするなど、仙南地域の拠点病院に相応しい看護体制を再構築した。</p> <p>加えて、宮城県看護協会仙南支部長として地域の看護管理者間の連携を深めるとともに、県看護職員確保対策等検討会委員を務めるなど、地域および県全体の看護職確保・将来構想にも注力している。現在は看護部長として組織を統括し、多職種と連携しながら、地域医療の安定と発展に多大なる貢献を果たしている。</p>
<p>看護師</p>	<p>きたしろう しょうこ 佐藤 彰子</p>	<p>社会福祉法人宮城県社会福祉協議会 特別養護老人ホーム和風園 医療課長</p>	<p>昭和 63 年の看護学校卒業後、県外の高度専門医療機関の ICU・CCU 等において、急性期医療の最前線で重篤患者の看護に従事した。循環器看護認定看護師として、高度な専門性と迅速な状況判断力を研鑽し、循環器領域における看護の実践力向上に寄与した。</p> <p>平成 7 年に宮城県社会福祉協議会へ入職後は、障害者支援施設の現場において利用者の健康保持に尽力した。特に平成 16 年には、特別養護老人ホーム和風園にて、当時制度化の途上にあった「看取りケア」にモデル的に取り組み、家族や関係機関との連携体制を構築するなど、実践の中心的な役割を果たした。また、生活介護事業「ふわり」の立ち上げ期から参画し、相談支援や在宅生活継続支援を総合的に提供することで、障害者とその家族が地域で安心して生活できる基盤を確立した。</p> <p>現在は成人利用者に加え障害児へのケアも担い、医療と福祉の有機的連携による質の高い看護を実践している。コロナ禍の集団発生時にも的確な指導力で収束に貢献したその誠実な姿勢は、後進の看護職にとって大きな指針となっている。</p>

<p>看護師</p>	<p>残間 由美子 ざんま ゆみこ</p>	<p>公益財団法人宮城厚生協会 坂総合病院 副看護部長</p>	<p>昭和 55 年に公益財団法人宮城厚生協会長町病院へ入職して以来、46 年の長きにわたり地域医療の現場で看護業務に従事した。施設内の感染管理者として、法人全体の施設および地域医療の質向上に尽力した。</p> <p>宮城県内では 3 人目となる感染管理認定看護師の資格を有し、宮城 ICN ネットワークや感染管理ベストプラクティス研究会の立ち上げに参画。感染対策の向上のために地域連携ネットワークを構築し、リーダーとして指導的な役割を果たした。新型コロナウイルス感染症の流行期には、厚生労働省のクラスター対策班の一員としてマニュアル作成に携わるとともに、実際にクラスターが発生した施設へ出向き、直接的な指導にあたった。</p> <p>退職後は NPO 法人みやぎ感染予防教育推進ネットワーク「きれいな手」を設立。宮城県から介護施設等感染症対策研修事業の委託を受け、年間約 50 件、約 800 名を対象とした出前講座を実施するなど、継続して地域の感染予防に貢献している。</p>
<p>看護師</p>	<p>渋谷 幸江 しぶや けいえ</p>	<p>宮城県看護協会 柴田・角田地域訪問看護ステーション 所長</p>	<p>昭和 60 年に宮城県立名取病院（現・精神医療センター）へ入職後、同センターや県立がんセンターでの勤務を通じて管理経験を積んだ。平成 24 年には宮城県看護協会柴田・角田地域訪問看護ステーションに所長として着任。積極的に地域活動へ参加して関係機関と信頼関係を築くとともに、精神科看護の経験を活かし、精神疾患利用者の地域生活継続を多大に支援した。</p> <p>仙南地域において在宅医療に注力し、地域の医師と協働して住民の緩和ケアや在宅での看取りを支えた。その真摯な活動は、コロナ禍においても変わることなく住民の在宅療養を支え抜いた。また、管理者として新人からベテランまで個々の強みを活かした計画的な育成を実践し、相互援助ができるチーム力の強い組織を作り上げた。</p> <p>定年退職後も非常勤として勤務し、後輩への後方支援や医師と協働した在宅緩和ケアに継続して取り組むなど、地域医療・福祉への貢献は極めて顕著である。</p>
<p>看護師</p>	<p>鈴木 郁子 すずき いくこ</p>	<p>介護老人保健施設なとり 総看護師長</p>	<p>昭和 53 年より看護師として従事し、これまで医療現場や看護管理者、看護協会理事などの要職を歴任した。NTT 東日本東北病院にて 5 年間、その後東北医科薬科大学若林病院にて 4 年間にわたり看護部長を務め、地域医療の発展に寄与した。</p> <p>令和 2 年度からは、医療法人仁泉会介護老人保健施設なとりの総看護師長に就任。コロナ禍において病院で培った知見を活かし、職員教育や施設全体の感染防止対策を徹底した。認定看護管理者の資格を有し、施設の教育体制を再構築するとともに、学会発表の支援や自らも発表を行うなど、多職種と連携した施設運営に積極的に関与している。また、県内の看護師育成を推進し、令和 7 年には自施設において感染管理認定看護師を誕生させた。常に看護・介護の質向上と多職種協働の視点を持ち、地域福祉活動に貢献し続けている。</p>

<p>看護師</p>	<p>すずき みかこ 鈴木 美嘉子</p>	<p>医療法人くさの実会 光ヶ丘保養園 看護副参事</p>	<p>昭和 58 年 4 月の入職以来、43 年の長きにわたり地域医療の現場において看護業務に従事してきた。長年の経験を通じ、看護師の模範として人材育成や看護の資質向上に大きく貢献している。</p> <p>看護管理者としては 11 年間役職を担い、院内では衛生委員会や記録検討委員会に所属。多職種との協働を推進し、病院全体の医療の質向上を目指した取り組みを実践してきた。その献身的な勤務態度は、患者や家族、施設長をはじめとするスタッフから高く評価されており、周囲からの信頼も厚い。常に研鑽に励む指導者として、組織運営と後進の育成に寄与している。</p> <p>現在は看護副参事として、寝たきりや車椅子を利用する患者のケア、および開放病棟での勤務にあたっている。専門的な知識と技術を維持しつつ、現在も現場の第一線で患者に寄り添う看護を実践し続けている。</p>
<p>看護師</p>	<p>どい ちあき 土肥 千秋</p>	<p>国立大学法人東北大学 東北大学病院 看護師統括</p>	<p>昭和 62 年に東北大学病院へ看護師として入職し、副看護師長、看護師長、副看護部長を歴任。39 年の長きにわたり特定機能病院の最前線で看護の質の向上と医療安全の推進に多大なる貢献を果たした。</p> <p>看護実践においては、人工肛門（ストーマ）患者のケアの質向上に関する実践及び研究に取り組み、学会での発信や看護師育成に尽力した。また、医療安全管理者として事故防止体制を構築する傍ら、患者や家族との誠実な対話を重視し、医療の透明性と信頼関係の維持に努めた。あわせて、医療倫理コンサルテーションを推進することで、患者の意思を尊重する倫理観を組織全体に浸透させた。</p> <p>副看護部長就任後は、認定看護管理者として看護業務の再構築や看護師の専門性発揮とキャリア開発に注力した。さらに、その活動は院内に留まらず、学会役員や日本医療機能評価機構の評価調査者を務めるなど、看護界全体に貢献している。令和 8 年 3 月役職定年後も医事課の看護師統括として再雇用者・定年延長者のマネジメントに従事し、卓越したリーダーシップをもって看護の質向上に繋げている。</p>
<p>看護師</p>	<p>なかい あやせ 中井 文世</p>	<p>医療法人くさの実会 光ヶ丘保養園 看護師</p>	<p>昭和 51 年 4 月の入職以来、約 50 年の長きにわたり地域医療の現場において看護業務に従事してきた。長年にわたる真摯な職務遂行は看護師の模範となっており、後進の人材育成や看護の資質向上においても多大な貢献を果たしている。</p> <p>勤務態度は極めて献身的であり、患者や家族、施設長をはじめとするスタッフから厚い信頼を寄せられている。常に自己研鑽に励む姿勢は、優秀な看護実務者であると同時に、優れた指導者としても高く評価されている。</p> <p>半世紀に及ぶキャリアを経た現在も、急性期病棟において勤務にあたっている。その豊かな経験とたゆまぬ努力により、組織の安定と質の高い看護提供を支え続けている。</p>

<p>看護師</p>	<p>まつき みきこ 松木 美喜子</p>	<p>特別養護老人ホーム春の森から 施設長</p>	<p>昭和 43 年に看護師免許を取得して以来、30 年にわたり国立病院等で地域医療の発展に寄与した。平成 11 年に社会福祉法人みずほへ入職した後は、特別養護老人ホーム等の多岐にわたる現場にて看護師、介護支援専門員等の要職を歴任。介護予防から看取りに至るまで、対象者に寄り添った全人的な支援を実践し続けている。</p> <p>平成 21 年からは「特別養護老人ホーム春の森から」施設長として「笑顔のために、胸に」の理念を掲げ、組織を牽引。東日本大震災の折には、自らも被災し自宅を失う苦境にありながら、施設長として近隣住民や他施設の利用者らを迅速に受け入れ、2 年半に及ぶ献身的な支援を完遂した。また、週休 3 日制の先駆的な導入による労働環境の改善や、研修講師としての後進育成にも多大な貢献を果たしている。</p> <p>80 歳を目前に控えた今もなお、施設長として職務を全うする傍ら、看護師として現場に立ち続ける。その豊かな経験と深い慈愛、揺るぎない使命感は、利用者や職員から厚い信頼を集めている。</p>
<p>看護師</p>	<p>みうら ひろこ 三浦 弘子</p>	<p>登米市訪問看護ステーション豊里 所長</p>	<p>平成 2 年に看護師資格を取得し、平成 3 年より公立佐沼総合病院（現：登米市立登米市民病院）に入職した。外科病棟を中心に、人工肛門造設患者のセルフケア支援を標準化するなど、患者の生活を重視した看護の質向上に努め、周囲の信頼を得てきた。</p> <p>平成 21 年からは訪問看護ステーションに活動の場を移し、臨床経験を活かした迅速な判断と対応により、利用者や家族が安心して在宅生活を継続できるよう尽力した。令和 3 年の登米市訪問看護ステーション所長就任後は、教育体制の整備や業務改善に加え、精神疾患を抱える利用者の地域生活支援や、在宅看取りの体制構築にも取り組み、地域に根ざした看護を実践してきた。</p> <p>現在は登米市訪問看護ステーション豊里の所長として、多職種と連携を図りながら、利用者や家族が住み慣れた地域で生活を継続できるよう、地域包括ケアの推進に精力的に取り組んでいる。</p>
<p>看護師</p>	<p>みとうちん ちえ 明珍 千恵</p>	<p>国立大学法人東北大学 東北大学病院 副看護部長</p>	<p>昭和 62 年の奉職以来、30 余年の長きにわたり本県の高度急性期医療の最前線に精励し、看護の質の向上と組織運営の近代化に多大なる貢献を果たした。キャリアの大半を循環器・呼吸器領域に捧げ、同院初の心臓移植医療においては看護側の中心的役割を担った。多職種間の調整や安全な術後管理体制の構築、患者とその家族への精神的支援に尽力し、本県における移植医療の定着を支えた。</p> <p>平成 31 年の副看護部長就任後は、新型コロナウイルス禍において ICT を駆使したオンデマンド型研修システムを迅速に構築。徹底した安全管理下で看護学生の実習受け入れを継続させたことは、一病院の利益に留まらず、次代を担う看護人材の育成を途絶えさせないという強い使命感に基づく先見的な功績であり、県内の医療供給体制の維持に決定的な役割を果たした。令和 4 年からは総務担当の副看護部長として、職員の支援プログラム導入やデータに基づく人員配置により離職率の低減を実現し、働き方改革の先駆的モデルを提示した。</p> <p>令和 8 年 3 月末での役職定年後は、外来統括として看護部運営に関わっている。その卓越したリーダーシップに基づく功績は、本県看護職の地位向上と県民福祉の増進に寄与するものである。</p>

2 看護教育功労（1名）

医師	まつなが げん 松永 弦	仙台市医師会看護専門学校 学校長	<p>平成 18 年 4 月より、仙台市医師会看護専門学校看護学科（旧仙台市医師会附属高等看護学院）の非常勤講師として専門基礎分野を担当した。平成 23 年 4 月からは同校准看護学科（旧仙台市医師会附属准看護学院）においても教鞭を執り、20 年の長きにわたり看護師および准看護師の養成教育に邁進した。</p> <p>また、令和 7 年度末まで同校の学校長を務め、看護教育の現場を牽引して次代を担う看護職員の育成に尽力した。現在は仙台市医師会副会長として組織の運営管理を担うとともに、自クリニックの運営を通じて地域医療の発展に尽力している。長年にわたる献身的な指導は、看護教育の質向上に大きく寄与した。</p>
----	-----------------	------------------	---